共育型地域インターンシップのモデル構築

―田舎館村における事例研究を通して―

Model of Educational Internship in Local Community

西　村　君　平*、工　藤　裕　介*、小　寺　将　太*

Kunpei NISHIMURA, Yusuke KUDO, Syota KODERA

要　旨

共育型インターンシップとは、学生と企業、双方の成長を目指した新しいインターンシップである。弘前大学COC推進室は、共育型インターンシップの一つである共育型地域インターンシップのモデル構築に取り組むべく、青森県田舎館村において「共育型地域インターンシップin田舎館村」の研究開発を行った。

本稿では共育型地域インターンシップ in 田舎館村の過程を記述していく。これにより学生の主体的な試行錯誤の過程を中心内容とした新しい共育型地域インターンシッププログラムのあり方を描き出す。こうして得られた知見を元にして、共育型地域インターンシップの大学教育学上の意義について、現場での試行錯誤の方法論的な基礎の１つである「反省的実践」をキーワードとして考察する。

キーワード：COC・COC＋、インターンシップ、共育型インターンシップ、地域インターンシップ、地域おこし、反省的実践

１．背景と目的

本稿の目的は、平成28年度に田舎館村で実施された「共育型地域インターンシップin田舎館村」の過程を記述し、共育型地域インターンシップのモデルを構築することにある。

近年、わが国では経済産業省の主導で、共育型インターンシップが推進されている。従来、インターンシップでは、短期間の職場体験を行うことが主流であった。その目的は学生の職場や業界に対する理解を醸成したり、企業が学生の適性を理解することで、学生と企業の雇用ミスマッチを解消することに置かれている。雇用ミスマッチの解消は、学生にとっても企業にとっても、そして社会にとっても小さくない意義を持っている。しかし、雇用ミスマッチ以前に学生が社会人としての基礎的な能力を持っていなかったり、企業が若年層の雇用に後ろ向きだったりする場合には、従来型の短期間の職場体験を主としたインターンシップでは雇用ミスマッチは解決しない。こうした観点から、学生や企業の成長につながるような教育効果の高い共育型インターンシッププログラムの開発が政策課題となってきている（エティック2014）。

＊弘前大学COC推進室
COC office, Hirosaki University

表１：従来型インターンシップと共育型インターンシップの整理

	従来型		共育型		
タイプ	仕事理解型	採用直結型	業務補助型	課題協働型	事業参画型
特徴	職場や業界に関する理解の醸成	採用ミスマッチの解消	通常業務を責任を持って担当	組織の課題に関する調査や提言	実際のプロジェクトへの参画
活動	短期間の職場体験		中長期的な職業実践		
学生のメリット	社会を知る		社会人基礎力の涵養		
組織のメリット	学生を知る		学生を活用した業務の推進	学生の発想を生かした組織改革	学生を活用した新規事業の推進
社会的な意義	大学から社会への円滑な移行		企業や業界の将来を担う若者の育成		

経済産業省2014に基づき筆者作成

共育型インターンシップでは、学生と企業、双方の成長が目指される。今一歩踏み込んで言えば、共育型インターンシップの目的は職業的実践の基礎力、いわゆる社会人基礎力を養うこと、そしてこれに加えて、受け入れ機関側に学生の力を活用して自機関の職業的実践の改善や革新を実現することの２つの側面がある。活動内容は、通常業務の補助のような比較的従来型に近いものから、学生に新規事業を立ち上げさせるような驚くほど革新的なものまで、多様である。（表１）。

地方創生が国家の喫緊の政策課題となっていることもあって、共育型インターンシップの中には、受け入れ機関を企業から自治体・地域社会に代えた、新しいインターンシップも含まれる。こうしたインターンシップは、弘前大学のように、地域志向の教育改革を進める大学にとって、注目に値する取り組みである。

自治体や地域社会を舞台としたインターンシップに関する先行研究は、地域おこしに関連する研究として位置づけられてきた。研究内容は実践報告（特に効果測定）が中心であるが[1]、その中には佐久間（2003）や横山・中塚（2008）のように、実践報告にとどまらずインターンシップのツールやモデルを構築しようと試みた研究も散見される。こうした研究は大学教育にとっても示唆的である。しかし、インターンシップの教育プログラムとしての骨格を示すべく、共育型地域インターンシップ（およびそれに類する実践）について、大学教育学の観点から研究した先行研究は、管見の限り見当たらない。そのため共育型地域インターンシップを大学教育において推進するための基礎となるモデルは不在である。

そこで弘前大学COC推進室では自治体・地域社会へのインターンシップを「共育型地域インターンシップ」と呼称し、田舎館村を舞台にそれを企画・実施し、共育型地域インターンシップのプログラム開発を行うことした。将来的には、共育型地域インターンシップは、弘前大学の高年次教養教育科目（特にキャリア教育科目）として位置づくものとなることが期待される。

本稿は「共育型地域インターンシップin田舎館村」を事例とした共育型地域インターンシップのプログラム開発の帰結について議論する。具体的には「共育型地域インターンシップin田舎館村」の実践の過程を記述し、共育型地域インターンシップの特徴を明らかにする。その後、共育型地域インターンシップという新しいモデルの構築に向けた示唆について議論する。分析に用いる資料は、学生の活動を元に弘前大学COC推進室が作成した『平成28年度共育型地域インターンシップin田舎館村記録集』とする。なお、記録集は、本稿の検証可能性の担保の観点から、弘前大学COC推進室のHPに公表する。

[1] 近年の例として田中（2016）がある。

2．共育型地域インターンシップ in 田舎館村の実践の記述

(1) 事業発足の経緯と目的

共育型地域インターンシップ in 田舎館村は、弘前大学COC＋事業連携機関である「NPO法人プラットフォーム青森」からの提案という形で、2016年５月にスタートした事業である。

田舎館村は、田んぼをキャンパスに見立て、色の異なる稲を絵の具がわりにして大きな絵を描く「田んぼアート」で全国的に有名である。田んぼアート開催期間には、人口１万人にも満たない田舎館村に、30万人以上が詰めかけるなど、その経済効果は田舎館村にとって大きなインパクトを持っており、まさに田舎館村を象徴するような一大事業である。その一方で、自治体や地域社会にイベント運営のノウハウを持つスタッフが不足していたり、村内に宿泊施設がなかったりすることによって、田んぼアートの観光振興策としての潜在性は十分に発揮されているとは言い難い状況であった。

このような田舎館村の地域おこしの展望に鑑みて、田んぼアートを活用して、学生と田舎館村の双方にとって意味のあるインターンシップを実施するべく、共育型地域インターンシップin田舎館村がスタートした。

(2) 実施体制

先述した通り、共育型インターンシップの眼目は学生と受け入れ機関、双方の成長にある。そのため学生と受け入れ機関のニーズをすり合わせて双方にメリットのあるプログラムを設計し、さらにはプログラムを効果的にマネジメントしながら成果を上げていくコーディネーターの役割が重要である（経済産業省2014）。

共育型地域インターンシップin田舎館村では、COC推進室の工藤裕介･小寺将太がコーディネーターを務めることとした。両名は、コーディネーター役と合わせて、学生のサポートやケアを行うメンター役も担った。なお、自治体側の担当者は、「田んぼアート」にも関わりの深い、福士勝（田舎館村役場企画観光課長）、工藤康人（田舎館村役場企画観光課企画係長）、舘山一晃（田舎館村役場企画観光課企画係）、阿保和紀（田舎館村役場企画観光課企画係）が務めた。

５月に説明会を行い、23人の学生が説明会に参加した。最終的なエントリーは３名であり、この３名がインターンシップ生となった。学生は弘前大学人文学部現代社会課程社会行動コースの伊東遥（３年生）、八島愛美（３年生）、小松裕理香（２年生）である。

(3) 活動内容の設計と実施―地域社会・自治体の組織特性に適したインターンシップの模索―

共育型インターンシップでは、学生の活動内容は受け入れ企業が設定する仮説に依存する。すなわち、受け入れ企業が「現場の課題を解決し、実現したい状態を達成するための“打ち手の案（仮説）”を検討」（経済産業省2012）したうえで、学生に“打ち手の案（仮説）”を実行するように求めることで、インターンシップの内容が定まるのである。共育型地域インターンシップ in 田舎館村の場合も、初期構想の段階では、大学・自治体側が田んぼアートのさらなる充実に資する活動を仮説的に設定し、学生をその活動に従事させる予定であった。具体的な活動内容は、「経済効果分析」「情報発信」「イベント企画運営プログラム」「新商品開発」「民泊システム構築プログラム」とした。

しかし、共育型地域インターンシップ in 田舎館村では、大学・自治体が定めた“打ち手の案（仮説）”に基づいて活動内容を定めるという方法論は、インターンシップの早い段階で大きく修正されることになった。というのも、地域社会や自治体組織は、あらかじめ明確な仮説を設定して組織行動を厳密に管理することが困難な組織であるということが、次第にわかってきたからである。

そもそも地域社会は特定の目的を達成するために組み立てられた組織ではなく、自然に形成された共同体である。それゆえに、共同体のマネジメントを担う自治体組織もまた、少数の明確な目的を設定す

ることが困難にならざるを得ない。自治体組織は、必ずしも明確に定義されないような曖昧な組織目標を掲げ、目標の意味を日々の活動の中で吟味しながら、目標と活動の双方を徐々に明確化していく。こうした「組織化」（Weick 1979, p.4）を通した現実認識や価値観の多義性の縮減は、共同体や自治体組織のマネジメントにおいて本質的である。

このような考えがコーディネーターを中心に自治体担当者にも徐々に形成されていったため、実際の共育型地域インターンシップ in 田舎館村では、大学・自治体から明確な仮説を提示することは最後まで行わなかった。「経済効果分析」「情報発信」「イベント企画運営プログラム」「新商品開発」「民泊システム構築プログラム」は、“打ち手の案（仮説）”というよりも学生が自分で自分の活動を主体的に設計していくためのヒントと位置づけた。

また、“打ち手の案（仮説）”を明確化する代わりに、コーディネーターを中心として地域社会・自治体の組織特性に適したインターンシップのあり方を、学生とともに模索することとした。具体的には、学生に自分たちの興味関心に即して、初期仮説と必ずしも密接に関係しないようなものも含めて、様々な活動に挑戦するように促すこととした。学生の活動については日報の形で記録・共有することとした。あわせて、学生とコーディネーターの間で対面でのコミュニケーションを取る時間を充実させることとした。こうした丁寧なモニタリングを通して、インターンシッププログラムの最中に、その目的や内容を検討し続けることが、狙いであった。

こうした学生の活動は、時期区分に応じて３つに整理できる（表２）。「田舎館を知る期間」「とことん活動期間」「企画実践期間」である。表２の通り、「田舎館を知る期間」「とことん活動期間」において、学生はとりとめもない活動に終始している。このことは、打ち手の案（仮説）を大学や自治体が明確化しなかったことに起因している。

例えば「田舎館を知る期間」の「どろリンピック」は、田舎館における大きなイベントの一つではある。（どろリンピックは、泥の上でつなひきや徒競走など様々な競技をする運動会のようなもの、競技後はみんなで食事するというイベントである。）しかし、そもそも田んぼアートとの直接的な関係は弱く、“打ち手の案（仮説）”と直結していない。インターンシップの内容として必ずしも適切なものではないとすら言える。その一方で、イベントの内容はユニークであり、学生の興味を引くイベントでもあった。また、自治体や地域社会としても、どろリンピックに思い入れがあり、インターンシップにおいてどのような意味をもつのか判然としない部分はありつつも、インターンシップを通して学生たちに、どろリンピックに参加してほしいという願いを持っていた。これらの事情を勘案して、最終的に学生は、どろリンピックに参加することになった。

表２：インターンシップにおける学生の活動

田舎館を知る期間	とことん活動期間	企画実践期間
5/29 田んぼアート田植え	8/7 高経との交流②	10/7 お米ツアー本番
6/10 いちご農家訪問	8/9 お米ツアーテスト	10/8 子ども交流
6/11 高経との交流①	9/25 地方創生大臣訪問	10/24 農業体験
6/19 田舎館ぷらっとデー	10/1 高経との交流③	11/18 農家民泊体験
7/16 ねぷた制作	10/2 田んぼアート稲刈り	
7/24 どろリンピック		

写真１・写真２からも見て取れる通り、学生はイベントを楽しんでいた（写真１・写真２）。ただし、どろリンピック参加の時点では、こうした活動がインターンシップにおいてどのような意義を持つのか、全くもって不透明であった。

このような形で、学生は「田舎館を知る期間」「とことん活動期間」の間、とりとめのない活動を続けた。しかし、「企画実践期間」になると、「田舎館を知る期間」「とことん活動期間」における一見とりとめもない活動の中に、共育型地域インターンシップin田舎館村の教育プログラムとしての最大の特徴である、学生による仮説生成が秘められていたことが、徐々に明らかになった。

写真１：どろリンピックの様子（小松）

写真２：どろリンピックの様子（八島）

(4) 成果報告に見る「学生による仮説生成」の過程

そこで次に、学生による企画実践の１つである「田舎館村マニア増加計画」（伊東遥）を取り上げて、共育型地域インターンシップin田舎館村の特徴である「学生による仮説生成」について詳細に記述する。なお、学生による企画実践は、12月２日に開催した成果報告会において、学生から自治体への新規事業の提案という形で取りまとめた。田舎館村から９名、弘前大学から11名、そのほかメディア関係者の参加者があり、合計21名の成果報告会となった。

伊東によれば、「田舎館村マニア増加計画」というアイデアは、彼女が「田舎館を知る期間」に参加した、どろリンピックでの経験に遡る。

伊東は、成果報告会において次のように述べている。

> 実際に参加してみて、どろリンピックは、田んぼに囲まれた田舎館村でしか体験できないイベントだと感じました。また、大人から子どもまで参加していて、全身でどろを楽しんでいるような雰囲気が印象的でした。
>
> その一方で、家族や友達同士での会話はみられたが、村民と会話をしている様子があまりみられなかった点が気になりました。田舎館村には様々なイベントがあります。しかし、イベントにおいて、参加者はもともとの知り合いとのみ交流し、村民と交流する時間は少ないように思われました。これでは田舎館村の魅力は参加者に伝わらないのではないでしょうか。
>
> そこで私は「イベントではじめて出会ったような人とも会話し交流することで、参加者が田舎館村の様々な魅力を知り、それが田舎館を好きになることへとつながる」という仮説を立てました。そしてこの仮説に基づいて、参加者が会話し交流することを重視した企画を実施してみたいと思いました。それにより田舎館村の魅力にもっと触れられるはずです。
>
> （『平成28年度共育型地域インターンシップ in 田舎館村記録集』「田舎館村マニア増加計画」から抜粋）

このような仮説に基づき、伊東は子ども交流企画で子どもたちとともに田舎館の魅力を考える「お絵かきリレー」を実施した。この中で子どもたちは、田舎館独自の魅力を語り合っていたと伊東は言う。

そしてこの様子を見た伊東は、子供や大人といった観点や立場の異なる多様な人間がイベントで楽しく交流すれば、自ずから田舎館村の隠れた魅力を掘り起こし共有することができるとの確信を得たと言う。

最終成果報告では、一連の活動から得た示唆をもとに、イベント内での村民・参加者交流のあり方やリピーターを活用したイベント間での交流の継続についての提言を行なった。彼女の発表は次のような言葉で閉じられている。

> 私自身、これまでの活動を通して田舎館村の人のあたたかさに触れ、田舎館マニアになることができました。「交流」をキーワードにした取組で、私と同じように、「田舎館マニア」が増えていく可能性は低くありません。
>
> （『平成28年度共育型地域インターンシップ in 田舎館村記録集』「田舎館村マニア増加計画」から抜粋）

ここまで見てきた一連の過程は、学生自身の手による仮説の生成と検証の過程として記述できる。今回特に強調したいのは、学生自身によって、仮説の生成を行っている点である。この点こそが、既存の共育型インターンシップの理念型との顕著な差異だからである。

3．共育型地域インターンシップin田舎館村の効果の記述
―ルーブリックとポートフォリオによる評価に基づいて―

共育型地域インターンシップの主眼は、学生と自治体の成長にある。これを踏まえて、学生による仮説生成を重視したインターンシップは学生や自治体に何をもたらしたのか、田舎館村における全ての活動を終えた後で、学内にてルーブリックとポートフォリオを活用したリフレクション[2]を通して検討した。本節では、ルーブリックとポートフォリオによる評価結果を元に、共育型インターンシップin田舎館村の効果を記述していく。

(1) ルーブリック

ルーブリックとは、学生の活動の質を評価するために用いられる評価基準の一種である。その特徴は、複数の基準と尺度を組み合わせた表の形で、評価の枠組みをわかりやすく整理する点にある（松下他2013）。今回のインターンシップでは、弘前大学COC推進室が作成した「地域志向人財ルーブリック」を用いた。「地域志向人財ルーブリック」は、弘前大学地域志向教育の育成目標である「地域志向人財」を９つの基準と５段階の尺度で整理したものである。さらに基準や行動例の解説ページを設け、わかりやすさの補強に努めている。

(2) ポートフォリオ

ポートフォリオとは、「作品集」の意味である。大学教育の文脈では、学習の過程で作成したノートやレジュメ、実習記録、あるいは学習の成果物として作成したプレゼンテーション資料などの記録をポートフォリオと呼ぶ。これを電子化したものがeポートフォリオである。実習などの活動の最中に情報の整理や共有のために用いるものを「ワークスペースポートフォリオ」、活動の終了後にリフレクションを行い活動の意義を証明する資料として作成するものを「ショーケースポートフォリオ」と言う

---

[2] なお、ここで言うリフレクションとは、インターンシップにおいて培った経験によって、自分の行為様式がどのように変化したか、回顧的に考察すること（reflection on action：Schön, 1983, p.26）を意味している。

表３：地域志向人財ルーブリック

育成する人財像	基準		尺度				
			実践・貢献	成熟化・省察化	主体化・内面化	初歩・入門	無関心
			4	3	2	1	0
グローバルマインドを持ち、地域に対する愛着、地域の創造を目指す意欲をもった人財	1	グローバルマインド	異なる価値観をもつ人と積極的に関わり、共生・協働できる	異なる価値観を持つ人を尊重し、その価値観を受け入れることができる	異なる価値観を理解することはできる	異なる価値観をもつ人がいることを知っている	異なる価値観をもつ人がいることを知らない
	2	地域志向（愛着・コミットメント）	多角的な地域理解に基づき、自覚的に地域に根を下ろして活動している	地域について多角的な知識を有し、その実態を複眼的に理解している	地域の歴史や文化、経済等を自ら学んでいる	地域について初歩的なことを知っている	地域に関心がない
	3	創造を目指す意欲	既存の枠組みにとらわれず、多種多様なアイデアを出すことができる	独創性を感じさせるような質の高いアイデアを出すことができる	普段から積極的にアイデアを出そうと努力している	現状を多少改善するような簡単なアイデアを出すことができる	現状に満足し、創造を目指そうとしない
複雑化する地域課題に文理の枠を越えて総合的にアプローチできる文理融合型の人財	4	文理の基礎的な教養	文理を問わず、幅広い分野の基礎知識を体系的に学修している	文理を問わず、幅広い分野に興味を持ち，学修している	幅広い分野について学修している	自分の関心に従い、幾つかの分野の学修を始めている	知識を求めない
	5	他領域の専門家との協働	自分と異なる領域の知識や技能、考え方を理解して尊重し、柔軟に協働できる	はっきりした役割分担のもとで、他領域の人と一緒に活動することができる	異なる領域の専門家と関わることができる	自らの専門領域の中では、他者と協働できる	他者と協働できない
	6	複雑な課題にアプローチする力（課題解決能力）	自らの知識やスキルを活かして、複雑な課題を多角的に分析できる	自らの知識やスキルを活かして、複雑な課題を分析できる	教員等の支援のもとで、複雑な課題を分析できる	単純な課題を分析できる	課題をどのように分析して良いのかわからない
獲得した専門知を活用して地域の課題解決を主導できる人財	7	専門的な知識・技能	専門知を体系的に理解し、その発展に貢献できる	専門知を体系的に理解している	個々の専門知を自分の中で有機的に関連づけて理解している	入門的な専門知を断片的に有している	専門知を有していない
	8	地域課題へ専門知を活用する力	体系的な専門知を活用し、実効性のある地域課題分析と解決策提案を行える	体系的な専門知を用いて、地域課題の分析と解決策の提案を行える	幾つかの専門知を用いて、地域課題を分析できる	入門的な専門知を用いて、地域課題を自分なりに解釈できる	専門知を活用できない
	9	リーダーの役割	目標の実現に向けてチームを組織し、メンバーを動かすことができる	チームの個々人と関わることができる	リーダーとしてやるべきことを知っている	リーダーの漠然としたイメージを持っている	リーダーの役割が全くわからない

（森本2008）。

田舎館村のインターンシップでは、Microsoftが提供するクラウドストレージサービスであるOneDriveを活用して、ワークスペースポートフォリオを作成した。

また、インターンシップ終了後に、学生にルーブリックを精読したうえで、ルーブリックに記載された基準とワークスペースポートフォリオに記録された資料に基づいて、自己評価を行うように指示した。なお、学生の自己評価ではメンターによるファシリテーションを行った。その後、学生の自己評価を踏まえて、メンター（工藤・小寺）および田舎館村担当者による講評を行った。これら一連のリフレクションの結果は、ショーケースポートフォリオとして『平成28年度共育型地域インターンシップ in 田舎館村記録集』の一部に納めた。

写真３：ワークスペースポートフォリオ

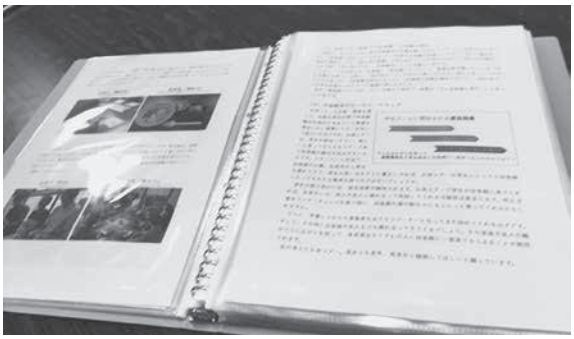

写真４：ショーケースポートフォリオ

(3) 学生の自己評価：主体的な探求への手応え

伊東は、ルーブリック「基準３ 創造を目指す意欲」「基準９ リーダーシップ」が身についたと自己評価を行なった。記録集の中の「創造的な経験をきっかけとしたリーダーシップの成長」と題した自己評価の文章の中で、「自分がゼロから企画した内容のイベントを参加者に楽しんでもらえることができれば、自分にとっても励みになるし、もっと参加者のためにおもしろいことを考えようという気持ちになります。田舎館村でのインターンシップの一環として、私は「子ども交流会」企画を運営し、このことに気づきました。」（記録集より抜粋）と語って

いる。

小松はインターンシップにおいて民泊の普及に関する提言を行なっている。彼女はインターンシップで唯一の２年生であり、教養や専門知識、地域社会との交流に必要なスキルの面でも不安を抱えてのスタートであった。しかし、彼女は民泊という必ずしも自分の専門分野とは言えないテーマを、弘前大学でグリーンツーリズムを研究する藤崎教授に教えを請うなど積極的な調査が目立ったインターンシップ生であった。また、彼女自身が「そうして得た知識を現実のものにするために、田舎館村での活動に戻ってからも、役場の方や田舎館村の農家さんとお話をしたり、実際に農業体験もさせてもらったりといろいろな方と関わりながら事業化に取り組んでいきました。」（記録集より抜粋）と述べるように、大学での学習をインターンシップで活かすことができたことは、彼女の今後の学びの基礎となる体験であった。こうした体験により、小松は「基準５　他領域の専門家との協働」に関する力が身についたとしている。

八島自身の自己分析によれば、インターンシップ以前は「新しいことに取り組むことや、おもしろいことに挑戦することに少し抵抗があり、『自分で一からやるのが面倒』『失敗したら怖い』と思っていました。」（記録集より抜粋）と言う。そんな彼女は「ツアーの企画書を担当の方に見せる時には『これで良いのかな』『実現可能なのか』と不安でいっぱいでした。」と述べているが、その不安を乗り越えて「お米ツアー」の企画運営を最後までやり遂げている。インターンシップを終えて、彼女は「基準３　創造を目指す意欲」が身についたとして、次のように述べている。「もとからそこにある物を活かすという方向性ではありましたが、そのなかでおもしろさを追求していろいろ工夫したところが、参加者の印象に残っていたようなので良かったです。 田舎館でのインターンシップを通して、何か新しいことを一生懸命やってみる、そしてそれができた時の達成感と楽しさと喜びを感じることがきました。」（記録集より抜粋）

いずれの学生も、それぞれの言葉で自分たちがインターンシップで行なった主体的な探求に対する手応えを表明している。学生自身によって仮説生成から活動を立ち上げていく試みは一定の教育効果を生んだと言える。

(4) メンターおよび自治体からの講評

インターンシップ生の自己評価が終了した後で、メンターおよび自治体からの講評を行なった。講評にあたっては、メンターおよび自治体に対して、学生の活動に関する記録およびその特徴についての記述（仮説生成からの立ち上げ）を確認のうえでインターンシップの意義を考察するように依頼した。

メンターからの評価として、工藤は「田舎館村で自分は何を行うのか、それを見出すこと、そしてどのように実行するのか、大きくはこの２つに学生は悩んだように思えました。」（記録集より抜粋）という言葉で、小寺は「地域で活動することは、楽しさややりがいがある一方で、様々な困難や苦難という壁にぶつかります。」（記録集より抜粋）という言葉で、学生自身による仮説生成の部分の困難さに言及している。こうした言及は、仮説生成部分の困難さが、インターンシップ生の成長と密接に関わる、インターンシップの隠れた山場だったことを示唆している。この山場を超えた実感は、「自分がゼロから企画した内容のイベント」（伊東）や「ツアーの企画書を担当の方に見せる時には『これで良いのかな』『実現可能なのか』と不安でいっぱいでした。」（八島）といった言葉にも現れている。

自治体からの評価では、「学生が長期間にわたって地域で活動を行ったこのインターンシップは、これまで村が受け入れてきた、役場業務の一端を体験していただくような就業体験とは全く異なるものであり、学生は役場庁舎ではなく村全体をフィールドとして活動し、大きなイベントから地域住民の日常生活、地域産業などを調査、体験していました。自身の名刺を携え、村を巡った様子をSNSで発信しながら、学生は自主企画を実施し、効果検証を行って地域を活性化させる提案へ繋ぎました。」と述べられている。この言葉は、自治体サイドが共育型インターンシップの基本方針を深く理解していること

を示している。

さらに、講評の後段において、学生の活動が自治体職員や地域住民の認識に変容をもたらしていることを示唆する次のようなコメントを残している。

> 学生が実施した企画は、各種メディアや村の広報紙、村地域おこし協力隊のSNSなどで紹介されましたが、実施企画以外にも、地域の伝統行事やスポーツ大会、ねぷた制作現場の訪問などで住民と交流をしており、接した住民からは「初めて見る光景や疑問に思ったことなど、学生から質問されたことがとても珍しく、新鮮に感じた」と話した方がいました。
>
> 地域の活性化には村を訪れる人と地域住民との交流を図ることが効果的ではないかという学生からの提案のとおり、今後もインターンシップ生が村を訪れ、地域住民と交流を続けていくことで、学生だけではなく、村も住民も自分たちが住んでいる地域の特色の再認識に繋がるのではないかと期待しています。
>
> （『平成28年度共育型地域インターンシップin田舎館村記録集』「田舎館村への影響」から抜粋）

このような自治体からの評価から、「組織化」の過程に学生が参画したことによって自治体職員・地域住民の持つ現実認識や価値観が浮き彫りになり、その枠組みが共有されたり、変化して行ったりする兆しを読み取ることができる。こうした変化は共育型地域インターンシップの受け入れ自治体・地域社会への教育効果と認められる。

(5) ルーブリックとポートフォリオを活用した教育評価の有効性

ここまで見てきた通り、ルーブリックとポートフォリオを活用した教育評価によって、学生そして自治体や地域社会に生じた変容の一端を記述することができた。このことはルーブリックやポートフォリオによる評価の有効性の傍証である。

特に、３人の学生が自己評価において、ただ単に何かの経験を積んだことに満足するのではなく、その経験がもたらした意識の変容について言及している点にも留意したい。この点が自分の行為様式の変化を認識していることの証左であり、インターンシップによる成長をリフレクションによって捉えることに成功していることを示唆するものだからである。

ルーブリックやポートフォリオを用いて、学生・メンター・受け入れ機関が対話を重ねる中でリフレクションを実現し、インターンシップの効果を検証していく手法は、共育型インターンシップのような長期的かつ多面的な教育プログラムの評価に適した方法と言えるだろう。

４．共育型地域インターンシップのモデル化

今回の田舎館村での実践において、学生の成長のみならず、自治体・地域社会の変容の兆しを見て取れたことは、今後、共育型地域インターンシップという新しい試みをさらに推進していく上で、大きな弾みとなる成果である。

ただし、学生の成長はともかくとして、自治体・地域社会の変容はあくまでも兆しであり、その兆しを大きく育て、自治体や地域社会に未知への挑戦への機運を高めたり、新しい価値観いわゆる新機軸を構築していくためには、共育型地域インターンシップのモデルを構築する必要がある。共育型地域インターンシップのモデルは、教育プログラムとして同様の事業を複数展開していくためにも有益である。

そこで本節では、田舎館村の事例を元に、共育型地域インターンシップの教育プログラムとしての一

般的な特徴[3]について議論する。

(1) 反省的実践家の養成―共育型地域インターンシップの教育目的―

共育型インターンシップの目的は学生に職業的実践の基礎力を養うこと、そしてこれに加えて、受け入れ機関側の職業的実践の改善や革新を実現することの２つの側面があった。では、田舎館村でインターンシップ生が取り組んだ、仮説生成から仮説検証に至る主体的な探求活動はどのような職業的実践に関わる力なのか。

この問いに対する答えは、反省的実践および反省的実践家（reflective practice/reflective practitioner）の理論に用意されている。反省的実践は、技術的合理主義に対比される専門職的実践の様式である。技術的合理主義に基づくと、専門職的実践で重要な要素は、実践の文脈から切り離された技術である。この観点からは、専門職的実践とは、すでに確立した知識や技術を用いて現実の問題を解決していく過程だと考えられる。

技術的合理主義に基づく専門職的実践は、問題がどこにあるのか明確な場合には機能する。しかし、そのような条件が整うことは現実にはほとんどありえない。

> 技術的合理性の観点から見ると専門家の実践は問題の解決の過程である。選択や決定という問題は、すでに確立された目的にとって最適な手段を利用可能なものの中から選択することによって解決される。しかし、この問題解決をいくら強調しても、問題の設定は無視されている。…現実世界の実践においては、問題は実践者にとって所与のものとして出されているわけではない。当惑し、手を焼く、不確かな問題の状況の素材の中から問題を構成しなければならない。…例えば、専門家がある道路を建設するかどうかを考えるとき、地理的に位相幾何学的にも財政的にも経済的にも政治的にも問題すべてが構成している複雑できちんと定義できない状況を扱っている。…専門家はこの種の不確かな状況が実践にとって中心的だと次第にみなすようになってきた。
>
> （Schön, 1983＝2001, pp.56–57）

学生たちが行なった試行錯誤の過程は、まさに反省的実践の一つである。そこではインターンシップ生は、田舎館村の現実を知り、そこに働きかけていく中で、インターンシップ生としての目的や手段を常に見直しながら、活動に取り組んでいた。こうした活動によって学生が反省的実践の基礎を身につけて来たことは、学生の自己評価、メンター・自治体の講評から読み取れる。また自治体の講評には、学生の活動に刺激を受ける形で、自治体や地域社会にも反省的実践の思考様式・行為様式の萌芽が育ちつつあることを読み取れる。このように反省的実践という概念で、共育型地域インターンシップin田舎館村の教育意義を抽象化して把握することが可能である。

反省的実践の思考様式・行為様式は専門職的実践の中核をなすものである。よって、学生および受け入れ機関の職業的実践の発達を志向する共育型インターンシップにとって、反省的実践の思考様式・行為様式の涵養は教育目的とするに相応しい価値を持っている。

(2) 非決定論的アプローチ―共育型地域インターンシップの内容と構造―

共育型地域インターンシップin田舎館村の研究開発の結果から、反省的実践家の養成を目的とした場合、インターンシップの内容と構造は、決定論的アプローチではなく、非決定論的アプローチに基づいて開発・運用されるべきであることが示唆される。

[3] プログラムの一般的な特徴は、タイラーの原理に従って、目的、内容・構造、評価で整理する。タイラーの原理については、Tyler（1949）参照。

決定論的アプローチとは「どのようなことが起こるかは、あらかじめ（初期条件によって）決定されている」（紺野2005, p.66）と主張する立場である。活動の内容や方法、成果を確実に担保することが重視され、原理原則に則った演繹的な発想でインターンシップを設計していく。ここではインターンシップの枠組みの立案とインターンシップの活動の展開は分離されている。当初の予定にない活動は不測の事態（contingency）として忌避される。このようなアプローチは、反省的実践の考え方には非適合的である。

非決定論的なアプローチとは「人間の意志や行動は、（筆者注：自分以外の）他の要因によってのみ決定されるものではなく、その人自身で決定する」（紺野2005, p.66）と主張する立場である。まず活動ありき、経験ありきであって、その中で思いがけず生じた出来事、気づき、アイデアに基づいて、状況的・帰納的にインターンシップの全体像が設計されていく。ここではインターンシップの枠組みの立案とインターシップの活動は非分離である。実際に活動していく中で生じた思いがけない出来事は、変化の出現（emergence）として歓迎される。このようなアプローチは、反省的実践の考え方に基づくものである。

田舎館村の共育型地域インターンシップは、初発の段階では決定論的なアプローチが採用された。その後、自治体および地域社会の組織論的な特性に鑑みて、決定論的アプローチを棄却し、非決定論的アプローチの採用へと舵を切った。この方針転換は決して小さな変更ではない。学生には少なくない戸惑いを与えたと推察される。しかし、このことが結果的に学生の試行錯誤を実現し、反省的実践の力を養うことに繋がった。また、学生を連れ立って自治体や地域社会に深く参入し、その経験を元にしてインターンシップの全体像を模索していくという非決定論的アプローチに基づくインターンシッププログラムの内容と構造が彫琢されることとなった[4]。これがひいては、仮説生成から検証におよぶ学生の主体的な探求へとつながり、さらには反省的実践力の涵養につながった。最終的には、非決定論的アプローチに基づくインターンシップのプログラム開発は、反省的実践家の育成という目的に親和的であることが示唆されるに至った。

(3) 熟議による協働的なリフレクション―共育型地域インターンシップの評価―

共育型地域インターンシップ in 田舎館村の事例において、学生および自治体・地域社会に反省的実践の萌芽を見てとることができたのは、ルーブリックやポートフォリオを活用した教育評価を実施したことによる。では、こうした教育評価の方法論は、どのように整理できるだろうか。

受け入れ企業によってあらかじめ仮説が設定され、活動の目的や内容がしっかりと定まっているような共育型インターンシップの場合、インターンシップの評価は、目標がどの程度達成されたか、そしてその元となる仮説は妥当だったかを検証する目標準拠評価が重要である。もし仮説が「新規顧客獲得による売り上げ20％アップ」といった数値で簡潔に表されたものであれば、インターンシップの活動の評価は、数値で厳密に評価することも可能だろう。

これに対して実践を通して仮説を設定し、それに基づいて活動の目標や内容を形作っていくような共育型地域インターンシップの場合、インターンシップの評価は目標準拠評価では行えない。むしろ実践を通してどのような成果が生じたのか、予断を廃して検討していくリフレクションが鍵となる。

田舎館における共育型地域インターンシップでは、ルーブリックとポートフォリオを道具として活用して協働でのリフレクションを行なった。これにより学生のリフレクションを実現するとともに、メン

---

[4] ただし、地域社会への参入は容易ではないという点にも留意が必要である。今回のインターンシップ生は全員弘前大学人文学部現代社会課程の社会行動コースに所属している（しかもメンターの小寺はそこの卒業生である）。社会行動コースは、2年間にわたる社会調査実習でフィールドワークの方法論を徹底指導するなど、いわゆる「野外科学」の伝統を色濃く引き継ぐカリキュラムを実施している。このことが地域社会への参入を下支えした可能性は低くない。学生を地域への参入させる前にどのような指導が必要か、その前提条件はどこにあるかなど、別途検討する必要がある。

ターや受け入れ機関からの多角的な評価を引き出すことができた。

このような評価方法は、学生の活動に関する記録をエビデンスとして活用しながら、立場や関心の異なる複数の人間が、インターンシップで生じた価値を模索したり、本当にその価値が生じたのか検証したりする熟議（deliberation）に基づく評価の一例である。反省的実践の萌芽を探索するような場合には、熟議を通して、多元的な観点からの協働的にリフレクションを行い、インターンシップの成果を全体論的に把握していくことが、有効である（House & Howe 1999）。

5．おわりに―知見の要約、意義、今後の課題―

(1) 知見の要約

ここまで見てきたように、通常の共育型インターンシップと比較した時の、田舎館村の共育型地域インターンシップの特徴は、学生が実践の中で自ら仮説を立て、それを検証していくような主体的な探求の過程に求められる。このような特徴が生じた理由は、自治体組織の持つ目的や手段の多義性という組織特性に由来している。学生自身の手による仮説生成という特徴を活かす形で、リレフションを重視した評価を行い、インターンシップの全行程を終えた。その後行った教育評価では、学生の成長ならびに自治体・地域社会の変容の兆しを確認することができた。

田舎館村の事例の記述を通して得られた一般的な知見として、共育型地域インターンシップに不可欠の３つの要素が浮かび上がってきた。インターンシップ生の反省的実践、非決定論的アプローチによるプログラムの開発と運用、熟議による評価である。これが共育型地域インターンシップの教育プログラムとしての骨格である。

共育型インターンシップの文脈に即して言えば、共育型地域インターンシップの教育プログラムの特徴は次のように説明することができる（表４）。共育型地域インターンシップの特徴は、学生の試行錯誤を重視する点にある。実際の活動は、学生主体の仮説生成と検証によって、拡散や収束を繰り返しながら、柔軟に進んでいく。このプロセスによって、学生は主体的な探求力を養い、受け入れ機関となる自治体や地域社会は未知への挑戦への意欲や新しい「物の見方」を構築したりすると期待される。これらの「共育効果」は協働的なリフレクションを通して確認される。このようなインターンシップには、どこに問題があるのかさえわからない地域社会の現状を打破する、地域社会のリーダーたる反省的実践家を育てるという社会的意義を有している。このように見ると、共育型地域インターンシップは「反省的実践型」の共育型インターンシップである。自治体組織や地域社会のみならず、目的・手段の多義性を有する組織、例えばNPOにおけるインターンシップにも、このモデルは親和的だろう。

表４：共育型地域インターンシップのモデル―共育型カテゴリー内の位置づけ―

	従来型		共育型			
タイプ	仕事理解型	採用直結型	業務補助型	課題協働型	事業参画型	反省的実践型
特徴	職場や業界に関する理解の醸成	採用ミスマッチの解消	通常業務を責任を持って担当	組織の課題に関する調査や提言	実際のプロジェクトへの参画	学生の試行錯誤の重視
活動	短期間の職場体験		中長期的な職業実践			学生主体の仮説生成・検証
学生のメリット	社会を知る		社会人基礎力の涵養			主体的探求力の涵養
組織のメリット	学生を知る		学生を活用した業務の推進	学生の発想を生かした組織改革	学生を活用した新規事業の推進	未知への挑戦 新機軸の構築
社会的な意義	大学から社会への円滑な移行		企業や業界の将来を担う若者の育成			地域社会のリーダーとなる反省的実践家の養成

(2) 研究の意義と今後の課題

本研究が記述した田舎館村の共育型地域インターンシップの姿は、インターンシップに対する社会的な期待が高まる今日の日本において、資料的な価値を持っている。また事例に関する教育学的な考察を

通して得た理論的な知見は、より一般的な「反省的実践型」の共育型インターンシップの方法論を提示している。

ただし、本稿で取り扱った事例は１つのみのであり、知見の性急な一般化は危険である。事例の少なさを補うべく、理論的な考察による抽象化を行なったが、それにも限界がある。今後さらに共育型地域インターンシップを展開し、反省的実践型のインターンシップに関する方法論をより頑健なものにしていく必要がある。

【参考文献】

エティック（特定非営利法人）（2014）『教育的効果の高いインターンシップの普及に関する調査報告書（経済産業省研究委託事業）』http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/intern/H25_Houkokusho_Zentai_Internship.pdf

弘前大学COC推進室（2016）『平成28年度共育型地域インターンシップin田舎館村記録集』http://coc.hirosaki-u.ac.jp/3442.html

House, E.R. & Howe, K. R.（1999）. *Values in Evaluation and Social Research*. Sage Pub.

経済産業省（2012）『成長する企業のためのインターンシップ活用ガイド（活用編）』http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/intern/guidebook-katsuyo.pdf

経済産業省（2014）『教育的効果の高いインターンシップ実践のためのコーディネーターガイドブック』http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/intern/H25_Coordinator_Guidebook_Internship.pdf

紺野登（2005）「ポシビリズムの戦略論―分析と計画から仮説と実践へ」『Diamond Harvard Business Review』July, pp.62–75.

松下佳代・小野和宏・高橋雄介（2013）「レポート評価におけるルーブリック開発とその信頼性の検討」大学教育学会編『大学教育学会誌』。

森本康彦（2008）「eポートフォリオの理論と実際」『教育システム情報学会誌』vol.25, no.3, pp.235–263。

佐久間康富（2003）「『地域づくりインターン』事業のこれまでとこれから―国土交通省事業と『地域づくりインターンの会』事業への評価からみる都市・農村交流の展望と課題」『早稲田大学教育学部学術研究 地理学・歴史学・社会科学編』52巻、pp.67–81。

Schön,D.（1983）The Reflective Practitioner, Basic Books, Inc.（＝佐藤学・秋田喜代美訳（2001）『専門家の知恵―反省的実践かは行為しながら考える』ゆみる出版。）

田中宏美（2016）学生インターンシップの受け入れ地域での意識調査と実績評価、『島根中山間センター研究報告12』、pp.1–7。

Tyler, R. W.（1949）. “Basic Principles of Curriculum and Instruction”. The University of Chicago Press.

横山沫・中塚雅也（2008）「地域インターンシップ制度の設計に関するアクションリサーチ」『神戸大学農業経済』40巻、pp.23–32。

Weick, K.（1979）The Social Psychology of Organizing, 2nd edition. Addison Wesley.